

藤井高尚の紀行文

—『山つと』を中心として—

工 藤 進 思 郎

一 近世紀行文—再評価への道—

近世における紀行文として、従来もつとも持てはやされ高い評価を受けて来たのが、松尾芭蕉を中心とする俳人たちのそれであることは、ここに改めて言うまでもあるまい。しかし、近世三百年の間に作られた紀行文ないし旅行記はおびただしい数に達し、しかもその大半が、実は俳人以外の人々の手になるものであるという事実を無視するわけにはいかないだろう。最近、高遠奈緒美・阪口光太郎・杉原来子の三氏によって作製された「近世紀行文翻刻複製目録抄」（『国文学解釈と鑑賞』平成二年三月号）は、芭蕉らの俳諧紀行を除き、ほぼ七〇〇編に及ぶ旅の記を挙げている。その凡例によれば、これは明治以降昭和六十一年までに刊行された近世紀行文の翻刻・複製テキストのみを対象にしたものであるから、写本や版本のまま伝わっている諸作をも加えるならば、その数は俊にこの数倍、いや数十倍にも膨れ上がるのではなかろうか。中央と地方、堂上と地下とを問わず、さらに言えば、その

文体が雅文・俗文・漢文のいずれであるかを問わず、俳人・歌人・狂歌師・文人・漢学者・国学者・宗教家・探検家等々、さまざまな人々が旅中の感懐を綴り、またその折の出来事や見聞をそれぞれに書き残しているのである。

それにしても、これらの紀行文ないし旅行記のうち、文学作品と呼び得るものは、いったいどの程度存するのか。いわゆる文学史の類が取り上げているのは芭蕉の紀行文くらいのもので、そのほかの諸家の作については、ごく最近までほとんど顧みられることすらなかったと言つてよい。しかし、このようにおびただしい数の旅の記を産み出した人々の情熱とその背景に思いをいたすと、近世という時代の知的・文化的エネルギーの偉大さには、今更ながら圧倒されざるを得ない。やや大げさな言い方をすれば、これらの諸作に目を背けたまま、近世文化史を語ることは、おそらく出来ないであろう。その意味において、それが文学であるか否かの検討も重要ではあるが、現時点でまず急がねばならないのは、近世におけるこの種の旅の記のさらなる発掘・紹介であり、

そうした地道な作業を積み上げることによってこそ、その再評価への試みも初めて可能になるのではあるまいか。

二 藤井高尚と紀行文

近世後期の国学者で、江戸の村田春海とともに和文の第一人者と称された藤井高尚の紀行文について、前述の「近世紀行文翻刻複製目録抄」は三編を取り上げ、それぞれ次のように記している。

出雲路日記（藤井高尚、文政十一年二月―三月、備中―出雲） 岡山大学文学部紀要4（昭58・12）

神の御蔭の日記（藤井高尚、寛政十一年、備中―東海道―江戸―本曾路―伊勢―大和―京―浪華―備中） 大神宮叢書

神宮参拝大成（昭51）

高尾紀行（藤井高尚、九月、京高雄） 碧沖洞叢書90（昭

44）

『出雲路日記』は、旅の翌々年にあたる文政十三年春、全文一七丁の一冊本として刊行された。『神の御蔭の日記』は、高尚三十六歳における長途の旅日記であるが、没後の天保十二年春に至って刊行をみた。二巻二冊、合わせて本文一〇二丁より成る長編である。『高尾紀行』は、本居宣長記念館の所蔵にかかる無外題の写本で、全文わずか三丁。文政七年九月二十四、二十五両日、尾張名護屋の学友植松茂祐・神倉元邦を伴い、京の高雄に遊んだ折のことを綴ったものである。

しかし、この三編のほかにも、高尚はなお数編の紀行文を遺している。すなわち、『山つと』『虫明の記』『そともの記』などがあるのである。『山つと』は、高尚三十三歳の寛政七年二月二十五、二十六両日、近隣の友人たち数人と連れ立って、備中の名勝として知られる郷谷（愛媛とも言う）を訪れた時のもので、同年三月八日欄筆の旨を巻末に明記している。後述の岡山県総合文化センター本によれば、本文一四丁より成る。これに對して『虫明の記』は、寛政九年六月二十一日付の自序を有する文集『衣魚のすみか』（写本、吉備津神社蔵）に収録されているので、それ以前に成ったものであることは間違いないが、正確な年次などは明らかでない。某年十月中旬、備前藩の郷学閑谷学校を経て、虫明の瀬戸の曙を眺めに行った二泊三日の旅の記である（五丁）。また『そともの記』は、若狭の小浜に出講した天保四年四月、同地の門人たちの案内で若狭湾の蘇洞門を探勝した日のことを綴ったもの。高尚は京から若狭に入ったと思われるが、その道中については記されていない。最晩年の自撰文集『松屋文後々集』下巻（宋刊）に収められている（五丁）。

これらのうち、『山つと』は他の二編に比してかなり長文で、高尚の旅の記としては上掲の『神の御蔭の日記』『出雲路日記』に次いで長く、若き日に成った代表的な紀行文の一つとして注目しなければならない。高尚が『山つと』を執筆したのは、すでに述べたように寛政七年三月のことであったが、この折に成ったの

は草稿ないし初稿と言うべきもので、静嘉堂文庫蔵『文章草稿』(写本)や、吉備津神社蔵『藤井高尚文稿』(写本)中の一編として伝わっており、全体にわたって本居宣長による添削の跡が見られる。これに対して清書本ないし定稿本と言うべきもの、すなわち師の添削を大幅に取り入れつつ改めて推敲を加え、巻末に旅中のスケッチ数葉を添えた高尚自筆の『山つと』は、かつて亀山北峰氏の秘蔵するところであつたらしい。しかし、同本の所在は目下のところ明らかでなく、今はその写しである岡山県総合文化センター蔵本や、同じく亀山本を底本にしたかと思われる花房鼓山・有元樓堂両氏編『豪漢紀勝』(明治三十九年、武内弥三郎刊)所収のものによって見るほかはない。それにしても、こうして初稿本・定稿本ともにその本文が伝えられたのは、まことにありがたいことと言わねばなるまい。

なお、右の『豪漢紀勝』についてここに一言するなら、同書は豪漢に関わる古人の詩歌や文章を収録したもので、巻頭に浦上春琴の「濠溪秋色図」を掲げ、以下、漢詩・漢文を中心に、武本君立・本城温・高雲外・衣笠清・仁科白谷・武元登々庵・武元恒・菅晋帥・浦上春琴・阪谷朗庵らの作を載せている。いずれも近世後期から明治初頭にかけて活躍した人々であり、当時すでに豪漢が備中随一の景勝として、多くの風流人士によって持てはやされていた事実を知り得るとともに、芝山持豊・小野務らの和歌を除けば、高尚の紀行文が唯一の和文である点を見落としてはなるま

い。『山つと』の中に、「この谷のながめは、からまにかきたる山水のありさまに、いとう似てしあれば、から歌ぞつきづきしかりける」という一文があるが、唐風の景観を写すのに取えて和文をもつてしたところに、擬古文に秀でた若き国学者高尚の面目と、その意欲的姿勢を認めることが出来るであろう。

それにしても、この種の紀行文を執筆するにあたって、高尚はどのような心構えで臨んだのであろうか。やや後年のものではあるが、文政十一年成立の『松の落葉』(天保三年刊)に収めた一文「かな文の旅の日記」において次のように述べているのは、高尚の旅日記観、すなわち紀行文学観を披瀝した言葉として注目しなければならない。

かなふみのたび路の日記は、貫之の土佐日記なんはじめなりける。さるからに、その日記に、「そのこのすなる日記といふもの、女もしてみんとすなり」とか、れき。男のきといふは記録のまな文にて、其をりく、ありとありつる事を、うるはしく正しくかける文になん。それを女手してかゝんとて、女のしわざのやうにいはいはれるなり。さるは、国の守の身におはぬすさみなればぞ。此日記の注釈ども、みなこのこゝろをときえず。かな文の日記は女のしわざなれば、そのこゝろさすやう、記録の文とはうらうへのたがひにて、旅の情をかきあらはすをむねにて、あはれを人に見えんとては、ものはかなげなることをもいふことになん。すなはち、土佐

日記ぞさやうなる。さるは、歌をかきまじふれば、ことさらにつくりてこそか、ね、歌物語のさまにかよへばなり。かゝるを、近き世の歌よみの、かれこれとかけろを見れば、さらにそのころをえずして、ものゝことわりなどを、われたけいひ、名どころの考をなが／＼といへることゝもおほきは、いとこちなくぞ見ゆる。かな文の日記のふりにたがへばなり。歌よむ人のこゝろえにとて、いさ、かいふになん。

〔松の落葉〕四の巻、27ウ―28ウ〕

これによれば、「旅の情」を描くことに紀行文の眼目があるのであつて、やたらに道理を説いたり、名所旧跡の考証を書きつらねたりするのは、その本旨に反する。旅中に詠んだ和歌を随所に折り込みながら、「ものはかなげなること」をも書き加えて、「あはれを人に見えん」とするところに、紀行文ないし紀行文学の本質を見ているのである。「ことさらにつくりてこそか、ね、歌物語のさまにかよへばなり」というのは、高尙が紀行文を単なる事実の記録としてではなく、まさに文学として位置づけていたことを証する言葉にはかならない。

この一文との関連において注目されるのは、寛政十一年中には脱稿していたと思われる『神の御蔭の日記』を、晩年に至って上梓するにあたり、その巻末に書き加えた跋文である。ここにおいて高尙は、この旅日記が記録性を重んじて執筆されたこと、すなわち「旅の情」を描くことよりも、旅中の出来事や見聞を細大洩

らさず書き記すことに主力が注がれていた点を厳しく反省して、次のように述べている。

此日記かきつるは、高尙^{三十五}のとしにて、今ははるけきむかしのことになむ。その頃は、歌よみ、ふみかきならふことをのみむねとはして、ものまなびまだしかりしかば、ありとあるあづま路の日記の、みなくはしからぬを、あかぬことに思ひあやまりて、ふりをかへて、めづらしくこまやかにかくを、たけき事として、松の落葉におのがいへるやうには、かなぶみの旅路の日記のやうをこゝろえずして、ものせしかば、今みるには、おほかたのかきざま、心になはねど、ざりとて、あづま路のあるやうを、かばかりこまやかにかけるものに見えねば、かいやりすてんも、さすがにあたらしく、人に見すべきにはたあらねば、づしのおくに年頃かくしおきしに、おのづからしる人のありていひけらく、「さかきざまはよからずと思ひたまふとも、あづま路のやうをこゝろえんには、いとよく侍れば、関のひがしにゆく人のために、さくら木の板にゑらせたまへ」といひて、そのかすにあはせて、なにはのふみあき人もせちにこふまに／＼、させさせつるになむ。

天保六年の冬

八九翁松斎藤井高尙

〔神の御蔭の日記〕下巻、57ウ―58ウ〕
後年におけるこれらの言葉に照らしてみても、「山つと」を執筆

した寛政七年頃の高尙には、紀行文に対するこれだけ明確な認識はまだなかったと言わざるを得ないだろう。しかしながら、すでにこの「山つと」において、長歌一首を含む二十首の和歌のほか、漢詩十一編を織り込み、かつ旅の途次に出会った人々の温情にもしばしば言及しながら、「旅の情」を描くことにも、かなり意を用いているように見受けられるのは注目し値する。概して抒情性に富んだ一編であるが、途中で一行に加わったとされる「をさなさらは」の旅中における動静を軽妙な筆致で描いて、全体が抒情に流れるのを引き締めているのも、なかなか巧妙な筆法と言えるであろう。なお、題名の「山つと」は、この一編を今回の旅の土産として与えるという趣旨で名づけられたものであるが、かねて同道することになっていた賀陽惟徳との別れの場面を、旅立ちの条にことさら書き記しているのも、この題名に響き合う印象的な記事として見過ごしがたいものの一つである。

以下、「山つと」の全文を掲げる。底本には岡山県総合文化センター所蔵本を用い、底本と異なる初稿本の本文を、静嘉堂文庫蔵「文章草稿」所収のものによって傍記した。なお、新たに句読点・濁点を加え、会話の部分には「」を付すとともに、底本において認められる明らかな誤写などは、「蒙溪紀勝」所収の翻刻文および初稿本を参照して補訂した。

三 校本「山つと」

山 つ と

郷谷紀行

ひとの国などにある海山のありさまは、おかしときくも、たはやすくはえ行見ねば、此わたりにさるべき所もがなと思ふをりしも、ある人のいひけらく、「ちかき所には郷谷といふ所こそけしきよけれ。水のながれ、山のたゝずまひなど、あやしくと所に似ず、からめいたる所なり」といへば、見まほしくて、れいのあたりはなれぬどち、みたりよたり、「山路の花も見がてらかしにものせん」とかたらひて、きさき廿日あまり五かの日になん出たちける。あすとの日、かたらひし人々、おのが家にきつどひて、ことゝもさだむるついでに、ひとりがいへるから歌、

雨後暗煙花木新 将携詞客弄中春
山陰遊賞興応好 況值風光上巳親

これをきいて、

こゝろもやさきにゆくらんかすみたつあすの山ちの見ゆる
おもかけにあすの山路のかすみ
そ見る
おもかけ
「曉に門出はすべし」とちきりつれど、春の夜のみじかに、我も人もいぎたなくて、とかくするほどに夜あけはてぬ。いたうやつして、ずさをもつれず、すけの小笠うちき、かれいひを袖のなかにいれてぞゆきける。賀陽惟徳の家のまへをすぐるにあはせて、かの人門に出たり。たちながらいめして、

わかかれゆかんとする袖をひかへて、

くみてしれその山水を見ても君おくる、人のふかきうらみを

とぞよみける。「こたびもろともに」と、ちぎりおきしかど、さ

はることありて、え出た、ず。さてなんかくはいひける。此歌を

あはれとはきけど、行さき遠しとて、人々心あわたりしく、

いそげば、かへしもえせずなりぬ。しばし行てたちどまり

ある人の、ひとりがいふやう、「かゝるありきには酒をこそものすべき

に、わすれきにけり。いかゞはせん」といふ、かたへなる家

にいりぬ。とばかりありて、ひさごめくものに酒いれて、ひささ

げきたり。その家より、をさなきわらはいで、「まろをもゐて

ゆき給へ」といふ。「わらはのまじりたらんもよかめり」と、

人々うなづきて、さきにたて、ゆく。つゝ、み山の麓をへて、野中

のみちをゆくに、ひばりのあがるを見て、人のよめる歌。

なくひばりつばさは空にかすむ野のしばふのとこにこゑはの

こりて

かくてながら川をわたる。むかしの歌に、「くむ人のよはひもさ

ぞな長月のながらの川のきくの下水」とよみたりしも、この

川のことになあらん。菊の花のをりならねばすさまじけれど、

たゞにやはとて、

ながら川名にのみきくの下みづのむかしのながれたづねてぞ

見る

とひとりごちぬ。川しもにながら山みゆ。その山の麓に、きくの

下水といひて、めでたき水ありとぞ。そはふる歌のこゝろをも、

わきまへぬもの、いつはりていひなせるにこそ。此みなかみは

山川なりけり。や、堤をのほりて、河原をぞゆく。かゝる道は、

ふみもならはねば、くるしきにえたへて、こゝろやりにいへる。

山かけのかはらのみちぞあしたゆきこいしふみつ、ゆきし

なやめば

あまりにたゞことなれば、きく人しのびてわらひあへり。

中にひとりいたうしづまりて、時々かしらかたぶけなどする人あ

り。あやしと見るに、なごりなくうちあみつ、から歌こゑあげ

ていひけり。

籬麦背々露未晞 荒村落々霏朝暉

朔遊漸覺山陰近 石徑羊腸行客稀

とは坂といふ坂をあへぎつ、のほりて、坂のうへになみゐてやす

む。れいのひさごめくものをおきて、ふところより益とり出

し、酒くみかはす。かのわらはは、くひものいそぎして、かれい

ひくひけり。それを見て、こと人々もそゝめきくふ。

このあひだにきしの鳴けれど、あるかぎり、くひものにこゝろいれて、

えきかず。中におとなしき人ひとり、「き、つ」とて、歌よみた

り。そのうたは、

つまやとおふをもちや 子をやおもふつまをやおもふそことなくかすむやまべにき

すなくなり

こゝろへだてぬどちにしあれば、かたみにかしこまりもおかず、

さるがうことなどうちひつゝ、坂をくだる。あひ過ていとやあやうげなり。しきは川はるかにみゆ。かのおとなしき人、

水のうへにひとはうかぶと見ゆるかなをちの川瀬をくだるし

ば舟

とぞいふ。くだれば、ひろき谷なり。こゝかしこに山がつの

小屋見ゆ。やまはたのめぐりに、石をたゝみて、かきめくものし

たるは、鹿をよせじと、かまへたるなりけり。げにかくせずは、はたつものを、みながらくひそこなひぬべし。や、ゆきて、

「こゝはいづこ」と人にとひければ、横谷とぞいひける。さして

ゆく郷谷も、此谷のおくとしきけば、遠からじと思へど、あな

しらぬ道にしあれば、たつきなきこゝちす。かたへに、いと大

な桜の木、たふれふしてかれたるあり。道ゆく人にとへば、

「こは名だゝるさくらなりしに、一とせのあらしのわきの風に吹

たふされぬ」といふ。いま五とせむとせはやくきたらましかば、

花の咲たるを見ましものをと、いとくちをし。かうやうのを、人

もいふことなれば、いかで歌よまんとおもひめぐらせど、さら

に出こず。そこを過て、道のかたへに山かたかけてつくりたる家

あり。門のあたりに里びたる犬の声す。

谷かげの腰がかどもる犬よさぞまれに入けを見てとがむらんとぞおほゆる。ゆきゆきて、かはらふきたる屋あり。「かゝるや

ま里には、にげなきすまひよ」といひつゝ、いりて足をやすめぬ。

いとにぎはしく、つかふ人などもあまた見えて、酒をうる家な

りけり。あるじ、心うつくしくて、はじめたる人としもなく、打

とけて物がたりす。「これよりおくは道もなき所ぞ停る。あな

いせさせ給へ。れいならひにたるものはべり」とて、人はしらせや

る。日のさす影を見れば、未の時ばかりなり。「かへさくれなは、

此わたりにこそたびねせめ。さりぬべきやどりやある」と、ある

じにとへば、「見給ふごとくやまがつの家の方に侍れば、おほせ

給ふとも、いなみもやし侍らん。よろづ見るしく、むらいなる

つみをだにゆるしたまはゞ、こゝにも」といふ。いとうれしう

て、よろこびいふをりしも、人來て、「いざかし。こなたへきませ

と、しるべするまに、ほそきみちを分ければ、ひだりみぎ

に谷わかれたり。右の倉のくちに、あふむ石といふ石あり。より

てぞ見る。川をへだてて、こなたよりもいふことを、かの石も

いひけり。人々あやしがりて、「いひにくからんことをいはせて、

こゝろみん」とて、ふるきから歌などを、つゞしりうたへば、か

なたにもうたふ。さらにひと言もあやまらず。かしろの髪もふと

る心ちしけり。ある人、ふところより筆とり出して、ただう紙に、

この石のすがたをうつす。此あひだに思ひしやう、

山びこの こたふる谷は いづくにも ありときけども こ

の石の ものいふあやし ものいはゞ 見ぬ世のことも

とひてんと 思ひてこしを かひなくも おなじことする

人まねよ こまろこしの 鳥の名を うべもおひけり ひ

のものやまとの国に かゝること 今はきこえず たづ

ぬとも たぐひなからん 神代より 言やめしものを 岩ね

草葉は

こはうち思ふまゝ、を

うちおもふまゝに、いひつゝけたるが、^{たれは}長うたのやうにぞなりける。おかしからぬ言を、かくながくといふべきことかは。ひきかへて、ある人おかしきから歌をぞいひける。

何歳山靈怪石生 影移横谷水流清

為天性好応人舌 邑俗戯呼鸛鶴名

ひだりの谷をゆけば、道のほとりに、大なる岩いくつともなくあり。此岩はひと、せ、なみふりしをり、峯よりまろびおちたりとぞ。今しもあらんことのやうに、いとおそろしくぞおほゆる。

かの郷谷にいたりてみれば、き、しよりもまさりて、ながめいはんかたなし。右ひだりの山は、びやうぶをたてたらんやうに、いははかさなりたり。たかさはいくちひろかあるらん。から歌に「けづりなす」とかいへるも、かやうの山のすがたにこそ。つたなき言のはおよぶべくもあらねば、かたはしまねぶもをこがましや。げに道もなきを、^{なし}谷川において、水のうへにあらはれたる石の上をぞつたひゆく。此ほどの雨に水まさりて、いとまながれはやく、山がつかよふたよりに、つくりおきたる石はしも、浪こえていとあやふし。ある人のよめる。

たぎりゆくながれを岩にせきかへしわたりわづらふ谷川のみ

づ

人々、手とりかはして、かたみにたすけられつゝぞわたる。わら

はをば、しるべする人おひて、さきにたちゆくが、やすげなるもうらやまし。からうじてや、ふかく入りてゆくまゝに、霞のた、ずまひも、^こ所がらはましておかしうみゆ。たちどまりて、ひとりがいへるから歌。

何識郷溪勝 如斯有怪奇 泉從屐底激
天似管中窺 翠壁遮行起 雲峯隨望移
停黎巨石上 遊目誤還期

この谷のながめは、からゑにかきたる山水のありさまに、いとよう似てしあれば、から歌ぞつきづきしかりける。うちつぎて、おほろけのやまと歌さしいづべくもあらぬを、「しれものなにがしも、よみたり」とて、えせ歌をぞいひける。

やま水のおとにきこゆるもろこしのその名どころもかくはあらじな

いとかたはらいたく、さしすぐいたるわざなりや。此歌のはちかくしがてら、ある人のいへる。

岩にそひながれにそひてゆくまゝにながめことなる谷のうちかな

又ある人のよめる。

山水のかゝるながめはたぐひあらじまたもわけこん岩のかけみち

かくいひて、ながめをれば、しるべする人、「はやかへらせ給へ。日もくれぬべし」といふ。げにとおもひて、もとし道をかへり

くるほどに、ひとりがいふやう、「なにがしの君こそ、見ぬ人のために、この山水のかたをかき給へ」といふは、ゑかく人をそのかすなりけり。「いかでかつかうまつらん。筆のおよぶべきはにもあらず」といらへて、うけひかぬを、せめていへば、しぶしぶに苔のうへにゐて、筆とゞこほらずかきながしたる山水は、打みたるけしきにもまさりたりけり。「ふる郷人の山つとこは、これをこそしめさめ」と、ある人々よるこぶ。夕日はなやかにさして、峯の梢あらはに、かへさのながめは又ことなれば、こ、かしこに立とまりつ、かへり見がちなり。わらは、み、のものとよりきて、「まろも、せくつくりたり」といふ。「いかゞものしたる」といへば、さすがにはぢらひて、

遙尋郷谷弄輝霞 夕統奇峯日將斜

逸奥如斯可尽醉 山中投宿杜康家

とぞ、ひそかにいひける。をさなきもの、から歌にてはよしやあしやあまれりやたらずや。ありし家にかへれば、あるじまちとりて、もやのむかひに、あたらしうつくりたるちひさき屋を、いとよくしつらひて、そこにやとしぬ。かはるく人々、ゆあみなどして、よりふしたるに、ある人のかきて出せるから歌。

投宿巖邑碧岸頭 泉声寂々晚暉幽

倦眠今夜松窓夢 猶有鄉溪奇絶遊

これを打ずしの、しりて、ねぶたさすこしさめぬるをり、盪出したり。つきく何くれとあるじしたれど、さるさかしき道をから

よりあゆみ、たへがたかりしかば、いたうこうじて、けしきばかりふれて、ふすまひきかづきてふす。谷川のおと、まくらがみに聞えて、いざときむちする夜のさまなり。

たびまくらねむるとすれば谷水の岩こすおとにおどろかれつ、

ねられねば、うちみじろくけはひに、ある人めさまして、しのびやかにいふをきけば、

かりまくらあすの山路をおもふぞよ川瀬のおとを雨にまがへて

とや。からうしてほどなく夜あけぬれば、いぎたなき人々をもおこして、例のことゝもして、やどりを出づ。かへさは、きのふの道かへて、岩壁ノ神社にまうでんとていそぐ。みちしれる人もなければ、とひき、つゝくるほどに、日たけて、しさはといふむらにいたり、かたへなるわら屋のすのこに、しりかけてながむるに、いひしらぬけしきなり。前にながれたるをしさは川とぞいふ。その川のむかひの山かげに、たてをならべたらんさまして、ものよりことにたかくみゆるは、いはおのかさなれるなりけり。そこにいますかる神の宮ぞ、神名式に見えたる岩壁ノ神社なるといふをき、て、くちとき人のいへる。

うごきなき世のまもりとて神もこのいはた、みにやいますならん

といふをりしも、舟のくだるを見て、おなじ人、

のとけしな棹さしくだすしば舟のゆくかたかすむ春の川なみ
しばしありて、筏のくだりければ、

こと、はん山かさなれるかはかみのながめやいかにくだすい
かだし

まことや、ある人のから歌いひしを、さきにき、しかど、この
けしきに見つきてわすれたりけり。思ひ出てかきつく。

臨川岩壘與山齊 上有古祠何路躋
一葉扁舟多少客 不知身作画中樓

ついでに、わらはのものせしをかいつく。

輕舟棹出岩疊陰 千巖競秀輒深
何恨志遊乏絲竹 目前山水有清音

なにがしが「山水に清音あり」といひしあることを、かゝるをり
に、ふとおぼえたるこそかしこけれ。こゝにても、れいのあかく
人、山水のありさまをうつす。さてのち、此しは川を舟にて
ぞわたる。かの神のみやしろのあたりの岩かげに、さしよすれば、
人々手あらひてをがむ。舟よりおりて、「いざ小石ひろはん」と
て、道のまゝにはゆかで、かはらをとめつ、ありきて、たゝみ川
のわたりにいたりて、舟まつほど久し。ある人のよめる。

川きしにたちやすらひてわたしぶねさしかへるほどをまつぞ
ひさしき

川をわたりて、非山にのぼり、宝福寺をとふ。むかし、雪舟とい
ひけるあしの、いとけなかりし時、おやなどすけさせせん

と思ひて
とて、此寺の大とこのでしとなしけるに、ものまなびはせて、

明くれ、あかくことをのみなん、たて、このみければ、師の大と
こ、いみじういさめつ、こらさんとにやありけん、からめて柱
にゆひつけおきしを、あまたのねずみあつまりて、からめたるな
はをくひたちけり。そのねずみは、この人からめられながら、涙
のおつる板じきに、足のをよびしてかきたりしものにぞありける。
大とこ、いたくめで、あかくことをゆるせしとぞ。そのかみを
思ひやりてよめる。

かしこくもたましひをさへうつしあのねずみ名だかきふる寺
ぞこれ

めぐるくみれば、木だちものふりたる中に、柴の戸とちて、人
けも見えぬむろなど、かずしらずありけり。ある人、あるくく
から歌うたふ。

竹徑沙清踏有痕 池頭犬睡護空門
徘徊深院倍閑靜 細々松声却覺喧
桜の花の咲たるをみて、ある人とわらはと、もろともから歌を
ぞいふ。かねてしも、いひあはせたらんやうなり。

魚折声沈長昼靜 閑行往々不逢人
唯看松際紺園裏 一樹桜花專九春

山頭邑露客衣寒 遙到香台日色闌
落英紛々春樹下 老僧總作雨花省

宝福寺
此寺をいで、かへる道は山路なりけり。

松ばらのかすむながめにくるしさもわすれてこゆる春の山みち

といひて、ながめつゝくるほどに、にはかに空かきくもりぬ。
人々、「あまけなり」といひもあへず、^{ふりく}「ぬるとも花のかげにかくれん」と、いひし人にはひきかへて、いとこちこちしく、道のほとりの花を^{さへ}だに見すて、うしろ手のみぐるしさを^{はしり}おもはず、きほひはしりて、おのが家々に、にけかへりつきぬとぞ。

こたび、みぬ人のため、もてかへりし山つとは、かの山水のかた、さては人々のものせられつるやまと歌、から歌、かずしらずとりそへたれば、たらはぬことなきを、ふくつけがりて、「なほあらんを」と、せめていふ人のありければ、えかくしはず、^{おのが}おのがえせうたをも、とうでぬ。かくはちをあらはしてのちは、今はたおなじと、たけきこゝろいできて、そのをり、^{ことを}めに見、み、にき、しことを、歌のかたへにかき^{しるし}しるしてひと巻となして、えさせたるになむ。

寛政七年三月八日

藤井高尚

〔付記〕 底本の写真撮影・翻刻を許可された岡山県総合文化センターと、「濠洲紀勝」について御教示を賜った倉敷市文化財保護委員古城

真一氏の学恩に対して深甚の謝意を表する。

（岡山大学文学部教授）

研究室受贈圖書雑誌目録(二)

- 甲南国文（甲南女子大学） 第三十七号
語学と文学（群馬大学語文学会） 第二十六号
語学・文学研究（金沢大学教育学部国語国文学会） 第十九号
国語教育（富山大学国語教育学会） 第十四号
国語国文（金沢大学） 第十五号
国語国文（東海学園女子短期大学） 第三十六号、第三十七号、第三十八号
国語国文学（福井大学） 第二十九号
国語国文学会誌（学習院大学） 第三十三号
国語国文学会誌（新潟大学） 第三十三号
国語国文学会誌（福岡教育大学） 第三十一号
国語国文学報（愛知教育大学） 第四十八集
国語国文研究（北海道大学） 第八十四号、第八十五号
国語・国文と国語教育（山梨大学国語国文学会） 第四号
国語国文論集（学習院女子短期大学） 第十九号
国語国文論集（安田女子大学） 第二十号